氣質に關する一二の問題

東京女子高等師範學校教授　古川竹二

一　知能と氣質

むかしは德育第一であつた我が國の教育も、明治になり何時の間にか、知育に傾き、殊に近年、智能檢査などが輸入されるに、一にも智能二にも智能、この兒童のIQは幾らに、智能を第一にする傾向が現はれて來た。しかし靜かに考へて見るに、智能のみがそれほど重大なものであらうか。

なるほど、學校時代には之が重んぜられる。二言目には成績成績と言ふ。何某はどうかと聽けば、彼はよく出來ると言ひ、或はあまり出來ないと言ふ。中學校などでは一番二番と席次をつけて、一番と五十番とでは恰も人全體が五十枚かた落ちて居るかの如く思はせて居る。が一たん卒業してからの、長いそして眞の人生に於てはどうであるか。もうこゝには智能を窺ふべき資料はない。試驗はない。それ故に何某は如何か、ときけば良い人だとか困つた人だとか答へる。或は我我が職に就いた時、園長なり校長なりについて人から尋ねられた時、やさしさうな人とか、きついやうな人とか答へるのが常であつて、我々の園長さんは秀才のやうな人だと答へる人は一人もないであらう。而してこの評こそ全人格に對するものであつて、智能よりも遙かに多く氣質が表はされて居るのである。

して見ると、智能は短い學校時代に關係をし、氣質は長い人生と關係を持つと云ふことになる。氣質研究の必要はこの邊からも窺はれるであらう。

二　氣質は變化するか

氣質は變化するか、と云ふことは興味ある一の問題である。世に修養なるものを重く見る人は、修養によつて氣質は反對なものにもなし得るかの如く說くのであるが、果してそれは可能であるか。元來氣質とは、人の感情意志の先天的の傾向であるとすることが出來る。後天的のものであれば、變へることも容易であらう、が生れついたものを、生れもつかぬものに變へることは、無理ではなからうか。このことにつき鮮かな意見を述べた學者が我が國に出て居る。荻生徂徠先生はその人である。徂徠先生はかつて、莊內侯の大夫水野氏の、氣質は變化するものなるか、との問に對して次の如く答へて居られる。

氣質は何とするとも變化ならぬ物にて候、米はいつ迄も米、豆はいつまでも豆にて候、只、氣質を養ひ候て其生れ得たる通りを成就いたし候が學問にて候、たとへば、米にても豆にても、その天性のまゝに實いりよく候やうにこやしを致したと候ごとくに候。しいなにては用に立申さず候、されば、世界の爲にも、米は米にて用に立ち、豆は豆にて用に立ち申候。

米は豆にはならぬ物に候、豆は米にはならぬ物に候、宋儒の說の如く氣質を變化して、渾然中和に成り候はゞ、米ともつかず豆ともつかぬ物になりたきとの事に候や、それは何の用にも立申間敷候。

と。あの元氣のよい、信念の强い學者の、この明快な氣質不變化の說は誠に味ふべきものではないだらうか。次に私は之に疑を懷く人の爲に幾らかの說明を加へ度いと思ふ。氣質は生れ付のもの故、之を人の身體にたとへ、如何やうにも變へ得るものである着物は、之を修養と云ふことにたとへることが出來やう。併し今、如何やうにも變へ得るもの、と言つた着物も、生れつきである身體の高低、瘦肥に適合したものでなくてはなるまい。左樣でなくては借着に見えるであらう。

修養の衣も同樣である。こゝが徂徠先生の「生れ得たる通りを成就いたし候が學問にて候」と云はれた意味である。一言にして表はせば「氣質上の個性に從つて修養せよ」となる、眞に意味ふかき答へではないか。

三　現時の氣質研究の方法に對して

今流行の氣質の研究法は、西洋人に工夫された質問法によるものである。例へば、

貴方ハ氣難シイデスカ　　ハイ　　イ、エ

貴方ハハニカミ屋デスカ　　ハイ　　イ、エ

と云つたやうな形式で答を取り、內氣な答が多かつたらその人の氣質は內氣であり、陽氣な答が多かつたら、陽氣な氣質だとする。而も、それ等の答への比を取つて、點數を以てそれを表はしたりする仕方である。

私はこの方法を見る毎に、その答へは信賴すべきものであらうかと思ふ。この形式はメンタルテストから取つたものである。併しメンタルテストに於ては、ハイ、イ、エの答へは、その一は眞であり他は僞である。而して、その眞僞はすべての人に共通したものである。例へば、

兄弟ガ三人アリ、皆一人ノ妹ヲ持テ居マス。ソシタラ皆デ六人ニナルワケデスネ　　ハイ　イ、エ

右の答へが「ハイ」ではなくて「イ、エ」であることは萬人に通じた點である。しかるに、前記氣質檢査に揭げられた問題の答としては、「ハイ」であつても「イ、エ」であつても間違ひではない。眞の氣質を答へたか否かは知らず、答としては何れも成立つものである。

併し今一歩をゆづつて、學生等を被驗者として之を行つた場合、言ひ換へれば、研究と云ふこと以外、何の利害もなかつた場合には、此の方法によつて概ね正しい答が得られるであらう。が私たちの求むるものは、左樣な机上に得た所の、

外面だけが整つたものではない。かやうなものは、一たん職業選擇などの場合に應用される時、何等の信頼性もなくなつて支舞ふであらう。例へば、保險の外交員を選む場合に、その希望者には「貴方ハハニカミ屋デスカ」に「ハイ」と答へる者は少からう。

それでは、人の氣質を知るには如何にすべきか、と言へば、それは智能檢査のやうに簡單には出來ない、とだけははつきり云へる。そして可能な方法としては、

一　よく觀察すること

二　照し合すべき鏡を求めること

右の外にはないであらう。

四　よく觀察すること

聖人孔子は、「其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや」、と教へた。然り、Behaviorist の言を俟つまでもなく、注意深き觀察者は、人々の日常些細の行動の上にも、その氣質がにじみ出でゝ居ることを知るであらう。人に長たる人々、人をよく使ふ人たちは、人々の行動によつてその氣質性格を忖度、或は之を直覺する卓れたる眼を持つて居るに相違ない。否、一つには左樣に卓れたる眼を有つが故に、人の長ともなり、人を使ふ身分ともなり得たものであるとも言へやう。我々にも左樣に鋭い眼が欲しいものである。殊に教育者には之が欲しいものである。

併し、我々の多くの者には、澤山の豪傑たちが己れを知る人として喜び服した西郷南洲の眼や、居ねむりの若き弟子大石良雄に、その偉大なる將來を卜した伊藤仁齋の眼が惠まれては居ない。こゝに第二のものが問題となつて來る、卽ち、

注意深き觀察を以て得たる鏡はないであらうか。據り所はないであらうか。たゞひ被驗者が便宜上の僞りを答へても、之に照らして之を見破る淨玻璃の鏡はないであらうか。若しもかやうなものが探し出されたとすれば、よしそれが曇りの多いものであつても、世を益することゞ少くはないであらう。

五　照し合すべき鏡を求めること

こゝにクレチュメル氏の「體格と性格」Körperbau und Charakter の說の存在の意義が深くなるのである。若しこの斬新なる學說が眞なりとすれば、我々は彼の揭げたる體格を鏡として、それ等の體格者の氣質性格を如實に知り得ることになる。これは眞に我々に取ての福音に相違ない。

それはそれとして私は更に據るべきものを人の血液型に求めてすでに十年の歲月を經、研究を進むれば進むるほゞ、之を興味深く感じつゝある者である。次に近頃經驗した一二の事實を述べて見度いと思ふ。

「文は人なり」と云ふ。我々は子供の時分から謙讓であれゞ、訓へられて來た。にも拘らず、多くの人の文、特に他人の論說などに對する批評の文などに接する時、それ等の文の勢や態度から、その人の敎養、氣品のみならず、その氣質をも窺ふことが出來るやうに思ふ。例へば、積極的、能働的な人々は、他人の論を批評する場合、內氣な受働的な人々から見ると、必要以上の强い或は烈しい言葉を使つて非難攻擊することが、しば〳〵見られる。私の微力な氣質論に對しても專門家や然らざる人々から多くの贊否の論を聽き、私は誠に之を光榮とするのであるが、それ等の人々、殊に非難者の論を讀む時、その感を深くすることは、その論じ方に、眞によくそれ等の論者の氣質が現はされて居ることである。私は後にそれ等の人の血液型を知つて、こゝにも亦その氣質との相關が眞によく示されて居ることを、却つて興味深く感じて居る。

又、個人の氣質は團體にも反映する。活潑な能働的な人の多いクラスは、クラスの風も活潑であり能働的であり、内氣な受働的な生徒の多いクラスは、級風も從つて左うである。今その實例を幼稚園關係の方々に求むれば、昭和十年卒業の東京女高師保育科のクラスの風は、誠に活潑であり進取的であり、卒業時の謝恩會などは、眞に賑やかなもので、數々の餘興が次々と演ぜられて盡くる所を知らずと云ふ有樣であつた。が本年卒業の同科の風は、つゝましい靜かな、寧ろ沈んだものであり、謝恩會の餘興なども、多からず、それも賑やかなものではなかつた。かやうな相違に就ては、倉橋主事も申されて居た所であるが、それでは、この兩科の人々の血液型の分布は如何であつたかと云ふに。

	O	A	B	AB	A/P	人數
十年卒	一二	六	六	○	三・○○	二四
十一年卒	三	一三	四	二	○・四七	二二

即ち、活潑であつた十年卒のクラスには能働型である所のO型者とB型者とが、他よりも遙かに多く、從つてA/P（之を私は團體性指數と名づく）が三・○○になつて居り、大いに能働的であるに對して、十一年卒のクラスは、指數が僅かに○・四七に過ぎない。このクラスが大人しく、受働的であつた理由が、鮮明にこゝに現はれて居ると言へるであらう。

備考　A/PトハOトBトヲ一括シテ能働型（Active Type）AトABトヲ一括シテ受働型（Passive Type）トシ、ソノ比ヲ取リシモノ。即チ

$$\frac{O+B}{A+AB}=\frac{Active}{Passive}$$

ノ故ニA/Pノ値ガ、

（一）一・○以上デアルホドソノ團體氣質ガ能働的。

（二）一・○以下デアルホドソノ團體氣質ハ受働的。

次に、毎年四月になると新入の生徒たちが、上級生に聽くと見えて、教育實驗室に來ては血液型の實驗をせがむ。この場合早く實驗室を訪れる者は、積極進取の人が多からうと云ふことは、誰もが想像する所であらう。

若し左樣であるならば、先に來る者には受働型者は少く、能働型であるOやBが多い筈である。果して然るか、之を確

むる爲に私は、昨年度の女高師(東京)の文科と理科の入學者につき、二日目までに實驗室に來た生徒たちを控へて置き、之を全級の生徒と比較した所、次のものを得たのであつた。

文科

	O	A	B	AB
全級生徒	八	一〇	一〇	三
二日目までの人	四	三	七	二

即ちO型者は八名中その半數。B型者にあつては一〇名中七名までは二日目までに實驗して居る、に對し、受働型であるA型者は一〇名中僅かに三名が實驗して居るに過ぎない。AB型者は外面B型的である人が多いので三名中二名が濟んで居る。次に理科は如何と云ふに。

理科

	O	A	B	AB
全級生徒	一〇	一〇	五	五
二日目までの人	七	三	四	四

この場合にも文科の場合と全く同じく、能働型であるO型とB型とは二日目までにその大部分が實驗を終えて居るに對し、A型者は一〇名中僅かに三名來りしに過ぎない。「刺戟ニ對シテ直チニ反應スル」氣質を有するB型者が殊に早い者に多いことは、眞に意義ある事實ではないであらうか。

更に今一つ例を加へるならば、次のことがある。凡そ試驗とさへ言へば學生は緊張するが、その試驗の際に學生たちの氣質が窺へるやうである。それは答案の出し方の早さ遲さである。答案を書き終るとサッサと出して教室を出て行く者と、書き終つては居るが容易に出さうとしない人とがある。私はこの態度は氣質の現はれの一であると思ふのであるが、若し左樣であるならば、それ等の人々の血液型の比較は又一の意義を有すると考へたので、私の關係して居るクラスに就て之を調査した所、次の結果を得た。次表は一〇四名から成つて居るクラスであるが、「早く出した方から」と「遲く出した方

から」と七名づゝを採つたものである。七名とした理由は、早い方の七番目に、A型者が出たので、遲い方のも七番目までを採て見たのである。

順位	早ィ方から	遲ィ方から
1	B	A
2	AB	A
3	B	B
4	O	A
5	AB	AB
6	B	A
7	A	A

即ち、「早ィ方」には私が「思ひきりのよい」「諦めの早い」として居るB型者が三名出て居り、その反對の氣質を有するA型者は一名である。之に反して「遲ィ方」の七名中にはA型者が五名もあるに對してB型者は一名あるに過ぎない。兩者に於て眞に興味ある相違を示して居る。更に私は二〇名乃至三三名より成れる八個のクラスに就き同樣のことを調査して見た。この場合にはクラスの人數が少いので、五名づゝを採り合計四〇名を得た。然る所雙方共に二名づつの血液型が調査洩れとなつて居たので血液型の明かなる者は三八名となつた。之に前記の七名を加へて四五名づゝを得たので、之を先づ實數によつて示すと次の如くである。

	O	A	B	AB	計
早ィ方	一二	一三	一四	六	四五
遲ィ方	五	二七	九	四	四五

更に考察に便ならしむる爲に、百分率にして之を示すと次の如くである。

	O	A	B	AB	人數
早ィ方	二六・七	二八・九	三一・一	一三・三	四五
遲ィ方	一一・一	六〇・〇	二〇・〇	八・九	四五

上を見ると「早ィ方」の組に於ては、私が能働型と稱して居る所のO型者とB型者とが、「遲ィ方」の組よりも遙かに多數で各々一〇パーセント以上の差を示して居る。而して「遲ィ方」の組に於ては、A型者は「早ィ方」の組の二倍以上となつて居る。AB型者は「早ィ方」の組に於て多くなつて居るが、之はB型者に通じる所があることは前にも述べた如くである。

更に、右表を本として團體性指數(A/P)を計出して見ると次表を得る。

	A/P
早ィ方	一・三七
遲ィ方	〇・四五

即ち、「早ィ方」の指數が一・三七で明かに Active であるに反し、「遲ィ方」に於ては、僅かに〇・四五にすぎず、前者に比して遙かに受働的であることを物語つて居る。

なほこゝに一言加へて置き度いことは、讀者のうちには、「早ィ方」は兎に角として「遲ィ方」の生徒等は或は不勉强者ではなかつたか、と考へる人もあるかも知れない、と思つたので、それ等の人人の成績を調査して見たのであるが、特記すべき優劣はなかつた。

以上に掲げた諸現象は、心身相關せる種々の作業に於て、人の行動とその氣質との間には、深き關係が存するその事例になりはしないかと思ふ。

六　結　び

始めにも述べたやうに、氣質の研究は智能の研究などよりも遙かに困難である。たゞ單純な內省を求めたゞけでその人の氣質を知り得たりとすることは、甚だしく早計である。宜しく諸種の方面より吟味檢證を遂げなくてはならない。觀察にあたつてもたゞ皮膚に留まつては眞の氣質を捕促することは出來ない。例へば、幼兒が駄々をこねてなか〳〵手におへないことがある。泣き叫んで困り果つることがある。之だけを見れば如何にも剛情でキカヌ氣の子供のやうに見える。併しかやうな子供のうちに却つて內氣な helpless な氣質の子供があることを屢〻經驗する。

それで如何かすると學校の先生にも、兒童たちの、眞の氣質が容易に分つて貰へないことがある。子を知る親に如かず、とはよくも云つたものである。更に、氣質を照合する鏡の一としてクレチュメル氏の說を一言したが、血液型氣質說も亦今一つのものとなりはしないかとひそかに思ふ。